荒らしを呼ぶ男

後藤正人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
荒らしを呼ぶ男

【Ｎコード】
Ｎ９１７７Ｏ

【作者名】
後藤正人

【あらすじ】
私が所属していた劇団でオリジナル台本のコンペに破れた曰くつきの作品を小説化したものです。７、８人が１時間程度で演じることのできる台本です。作成自体は古いため、ネタが少々古いのはご愛嬌。内容は、天気予報に尽力する男が周りの人の助けを得ながら方法を模索するコメディーです。感動やシリアスを求めてはいけません。その点、ご了承ください。

第1話「天気予報士右原ユウタロウ」

サムライテレビ。
余談であるが、サムライはブシであり、濁音を移してはいけない。
撮影スタジオ。ここでは現在、右原ユウタロウのお天気コーナーが撮影されていた。
どこかくたびれたスーツを身につけた男、右原ユウタロウが天気図を背にしていた。癖の強い髪型同様、その笑い方はさわやかさとは程遠い。
「右の原っぱと書いて右原。右原ユウタロウのお天気コーナーです。明日は雨雲の動きが遅いため、雨が降るとしても日が沈んでから。傘の必要はないでしょう。晴れの日はＵＶカットに日傘を忘れずに。雨の日は雨傘に照る照る坊主を忘れずに。あたった日はユウタロウに感謝を忘れずに。以上、ユウタロウのお天気コーナーでした」

翌日。天気は見事なまでの土砂降りであった。家の窓越しに天気を眺め、うなだれている若者が１人。
「ああ、雨だと塗料に湿気が乗る！　ガンプラが塗れない～！」
彼の手には、スプレー缶と、未塗装の百式が握られている。
「ユウタロウさんが雨は夜だって言ってたから。今日は百式を真っ黒に塗るつもりだったのに……」
余談であるが、百式はＺガンダムに登場したモビル・スーツであり、金色の装甲がその特徴にして象徴である。

ここはサムライテレビ社長室である。豪奢な机に、立派な椅子。腰掛けた男性はいかにも高価そうなスーツを身につけ、手にした資料を不機嫌そうに眺めている。

サムライテレビ社長中森ナオキである。
「傘はいらないという予報を信じて雨に降られたことが少なくとも２０回はある、４２歳会社員。週末は雨だっていうから出かけるのを諦めたのに快晴だった、３３歳主婦。ユウタロウさんではなく電話対応の私たちが怒られる。電話が鳴り止まなくてお昼休みがとれない。これはコールセンターの方々の苦情だ。ユウタロウ……、私は誰だ？」
社長机の前には社長とは見比べるべくもないスーツを身につけた気象予報士右原ユウタロウが立っている。
「サムライテレビ社長の中森なおきです！」
「そうだ。社の運営と責任を担う立場にある。そんな私がこんな苦情の山を看過できると思うか、ユウタロウ？」
ユウタロウは本当にわからないといった様子で眉をひそめた。
「わからないならためしに見過ごしてみたらいかがです？」
「いいアイデアだ。ただし、その結果、お前の首が飛んでもいいのか？」
「なぜ！？」
ナオキ社長が資料を机に放り捨てる。１０枚を越す資料が散らばった。
「これが全部お前に向けた苦情だからだ！　予報と反対のことしたほうがまだまし、とまで書かれている！　危機意識を持つべきではないか！？」
「社長……。自慢ではありませんが、ブログではもっとどぎついこと書かれてます。その程度、気にすることありません！」
力強く親指を立てるユウタロウに、社長は吼えた。
「なお悪いわ！」
ナオキ社長は怒りを通り越してあきれ始めていた。
「１１．６……。これが何の数字かわかるか、ユウタロウ？」
「山形県山形市の年平均気温です！」
「違う。お前の予報的中率だ！」

「山形県山形市の年平均気温です！！」
「そうかもしれんがお前の的中率でもある！　天気予報の難しさは知っているつもりだ。だが、せめて体温くらいにはあげて見せろ、ユウタロウ」
　さすがに3割程度でもましと言われて、ユウタロウは机を強く叩いた。
「平均気温が体温と同じなんて地獄ですよ！山形県山形市民を殺す気ですか！？」
　ただし、プライドをくすぐられたためではないらしい。
「いい加減に山形から離れろ！」
「山形県山形市民を見殺しにしろと！？」
　気苦労の多い社長は、椅子に寄りかかるなり額を抑えた。覆い隠された顔からは深い声が響いてくる。
「ユウタロウ……。私が火の中に飛び込めといえば油抱えて飛び込むやつなんていくらでもいる……。お天気コーナーの名前、変えてもいい頃か……？」
「お、お任せください！　ボス！！」
　それはそれは見事な敬礼を、ユウタロウは見せた。所詮はサラリーマン。尻尾は蜥蜴に逆らうことはできないのである。
「まずは数字を上げてみせろ。外れるんじゃ予報とは言えない」
「お言葉ですけど、そんな簡単なことじゃありません！　雨は地震と同じです！　予告なんてしてくれません！」
　力強さを取り戻したユウタロウに対して、ナオキ社長は目に見えて覇気が衰えた。
「どちらも自然現象だからな……」
「予告もなしに5分遅刻されただけでも腹が立つのに、雨がどれだけ非人道的な存在かわかりますか！？」
「お前がオーバーな奴だとはわかった」
「なら！」
「何がどう、ならに繋がるのかわからんが、そんなに雨が嫌いなら

会わないようにしてやろうか？ちょうど砂漠化ドキュメンタリーの長期撮影がある。２年は日本に帰ってこられんが……」
引き出しから取り出された企画書。わずか５枚程度の薄いものながら、その表面には灼熱の砂漠と照りつける太陽に焼かれる動物の骨が見ごろなカラー写真で表示されていた。
余談であるが、確かに砂漠は降雨は極めて少ないが、だからと年降水量が０というわけではない。
再び、ユウタロウの見事な敬礼が炸裂する。
「任せてください、ボス。体温どころか、風邪にしてやりますぜ！」
失礼しますの一言もなく、ユウタロウは社長室を飛び出した。残されたのは疲れ果てた社長である。
「３６も３８もたいして変わらないだろうに……」
ナオキの気苦労は絶えない。ため息１つついた。

社長室を後にしたユウタロウは普段とは別の撮影スタジオを訪れていた。
ここでは別のニュース番組の天気予報が撮影されている。
「明日は曇り空。時々太陽が顔を覗かせますけど肌寒く感じるでしょう。傘を持っていくかを悩むより、上着をもう一枚羽織ってください。以上、伊藤イオのお天気コーナーでした」
いおが緊張を解いたように大きく背伸びをしながらユウタロウの下へと歩いていく。スーツはしっかりとしたもので、ユウタロウより明らかに雰囲気が落ち着いている。
「お疲れ様、ユウタロウ。社長には絞られたみたいね？」
「どうして同期のお前が呼ばれない……？」
「私の的中率のほうがはるかに高いからに決まってるでしょ」
ユウタロウは難しい顔をして腕を組んでいた。こんな時、別に大したことを考えていないことをイオは知っている。

「なあ、イオ……。どうして雨は生まれて、生きて……、そして死んでいくんだろう……？」
「ユウタロウ……。ずいぶんと哲学的……でもないか、別に。いったい何？」
「社長に的中率が悪いって叱られた……」
「その通りでしょ」
さすがに激昂するユウタロウ。
「山形県山形市の年平均気温並みだとまで言われたんだぞ！」
合わせて、イオも声を張り上げた。
「それはあんまり。せめて岩手の年平均気温くらいあるのに」
「そうだろ……、って、もっと低いわ！」
ノリツッコミをするユウタロウ。イオは笑っていた。
「まあ、違っても2度か3度。平熱か風邪か程度の違いだって」
社長室での会話はもちろん、ユウタロウと社長しか知らないことである。
「貴様！　どこに盗聴器を仕込んだ！？」
ポケット、内ポケット、胸ポケット、とりあえず、何かを仕込めそうなところはあらかた探した。
「どこ探してるの？　そんなことしても無意味だって」
「そ、そうか……」
「そんな探し方じゃね。襟の内側」
イオに言われたとおりスーツの襟を返す。すると、盗聴器発見！
「いつの間に！！！！？」
ちょうど、某チ〇ルチョコくらいの盗聴器があった。
「昨日、ユウタロウが仮眠をとったときにちょちょいとね」
「コーヒーを飲んだとたんに急に睡魔に襲われた……。あのときか！？」
「ちょっと試してみたくて、薬をがさっとね」
「カフェインのせいだとばかり！」
余談であるが、カフェイン・アレルギーであると、紅茶もコーヒ

ーも飲めないため、自販機の半分の飲料を買うことができなくなる。
「普通目が覚めるはずなのに、ユウタロウの場合、カフェインの過剰摂取で気持ち悪くなる体質だから、きっとごまかせると思ったら、案の定」
「何のために！？」
ともかくわめき散らすユウタロウを、イオは軽くあしらう。
「登山家ジョージ・マロリーはこんなことを言ったという逸話があるの知ってる？　どうして山に登るのか？　そこに山があるからだと」
「答えになっとらんわ！！」
それでも、イオはまだまだ余裕である。うまく制止しながら、自分のペースに誘導する。
「まあ落ち着いて、ユウタロウ」
「落ち着けるか！！」
「ユウタロウが私と話したいことは盗聴器のことじゃないでしょ。天気のこと！　違う？」
「確かに！」
掌を叩くユウタロウ。その顔に迷いはなく、清々しいまでに目が澄んでいる。
イオ、小声で。
「ほんと、これでよく誤魔化されるね……、ユウタロウ」
「ん？」
「なんでもない。それより、話を戻そう」
イオは手を振った。
「ああ。だが、的中率なんてどう上げればいい……？いっそ、雨なんか降らなければいいのに……」
「それじゃあ、誰も天気予報なんて見ないって」
振った手が力を失い、手首から先がしおれたようになる。反対に、ユウタロウは声を張り上げた。
「ええい、忌々しい！」

「ユウタロウ、雨を責める前に、まず雨が何か理解してる？」
「水！」
「間違ってはないけど……」
「水だろ、水！　それ以外に何がある！？」
　イオは、まずユウタロウを落ち着けてから話を始める必要があった。
「雨は確かに水。でも、水だからこそ、人にとってはとっても重要。昔の人は雨が振ると、嘆いたりもしたし、喜んだりもした。雨が降りすぎると洪水が起きてたくさんの人が亡くなった。でも、雨が降らないと作物が育たなくて、それはそれで大変」
　おおげさなほど首を横に倒すユウタロウ。
「それはわかる。でも、それが天気予報と何の関係があるんだ？」
「天気予報もない時代から、人は雨と付き合ってきたってことは、その時代にもそれぞれ天気を見る方法があったということ。ねえ、ユウタロウ、昔の人はどんなふうに雨を知ろうとしたと思う？」
「そうか、昔の方法に天気予報の鍵があるんだな！？」
「雨のことを研究している人を知ってるけど、会ってみる？」
　どこからともなく名刺を差し出すいお。それをユウタロウはひったくるように掴み取った。
「当たり前だ、聞くまでもない！」
　言うが早いか、ユウタロウは撮影所を出て行こうとする。残されたいおが、邪悪な笑みを浮かべていることに気づきもしないで。
　ユウタロウが見えなくなるまで見送ってから、イオはスタジオ隅の椅子に置かれた自分の鞄を手に取った。
「さて、今度はどんな話が聞けるかな～っと」
　鞄の中から取り出されたのは、明らかに盗聴をするための受信機であった。イオは鼻歌交じりにイヤホンを自分の耳に取り付けた。

第1話「天気予報士右原ユウタロウ」（後書き）

皆さん、盗聴は犯罪です。絶対に行ってはいけません。

第2話「雨を降らせる（１０－９）の方法」

「こうして、私は雨を知るために東西南北中央大学の竹沢アキ助教を尋ねることになった。まず敵を知らなければ勝てる戦いも勝てない。盗聴癖は許せないが、イオはとても頼りになる。財布落としたときも十一でお金を貸してくれたし、寝坊したときも社内中にバレされただけで許してくれた。盗聴癖は許せないが……、ともかく盗聴癖は許せない……」。

ユウタロウ、自分で言っておきながらイオの評価が決してよくはないのではないかと気づき始めて腕を組んで悩んでしまった。

ユウタロウは雨の文化を研究する竹沢あきの研究室を訪れた。アキはサムライテレビの人ということで、テレビの取材と思い込み、あっさりと応接間にユウタロウを通す。２人は向かい合って座った。

「始めまして。私は竹沢アキと申します」

ごく普通のスーツを着た、ごく普通の女性である。

「雨の歴史や文化について研究なさっているとお聞きしました」

「はい。それで、どちら様でしょうか？」

ユウタロウは自分の名刺を差し出す。そこには、サムライテレビの右原とあった。

「私はこういうものです」

「天気予報士の……原さん、ああ、お父さんが都知事をされている……」

「いえ、親父は学者で、大腸の奇説とやらを発表しました」

聞きなれない言葉に、アキはつい自分が想定した単語を口ずさむ。

「太陽の季節……」

「大腸の奇説です。何でも、毎朝１００ｍを９秒台で走ると便秘に

ならないとか言ってました」
「……すいません……。どこからツッコンでいいかわかりませんから、順番に指摘します」
こほんと、一息つく。
「何がどうおかしいかわかりませんが、とりあえずどうぞ」
「まず、お父さんは太陽の季節ではなくて、お腹の大腸の、ちょっと変わった学説を発表した、そうですね……？」
「そうですけど」
ユウタロウは何が問題なのかわからないと言ったように首をひねる。
「恒星である太陽の、シーズンとしての季節ではないんですね……？」
「何です？　その太陽の季節って？　活動周期のことですか？　そんな用語、聞いたこともなければ、意味もわかりませんね」
アキ、烏賊でも食べているような顔をする。何かこう、歯と歯がいつまでも噛み合わないような、そんな渋い顔である。
「そうかもしれませんけど……。もう次行きます。続いて、１００mを９秒だなんて、誰が走れますか！？」
つい興奮するあきに対して、ユウタロウは不気味なほど冷静である。
「今ならタイソン・ゲイ、ウサイン・ボルトあたりでしょうか？」
「そんな一部の人にしか役立たない研究じゃないですか？」
「すぐに金になる研究しかしちゃいけないとでも？」
「いえ……、そんなことは……」
何かがおかしかった。ユウタロウの言っていることはおかしいに決まっているのに、正論を吐いているのはユウタロウの方である。
あきは、観念するほかなかった。
「わかりました。お父さんはちょっと変わった研究をされているんですね。ところでご用件は！？」
もう面倒はごめんだと、早口で本題へと持ち込む。

「雨のことを教えてください」
「雨ですか……。でも、私でよろしければお話しますけど、ユウタロウさんは天気予報士ですよね。どうして私のところに？」
話自体はまともかとは思いきや、その背景がみえないと訝しがるあき。何気なく、聞き返した。
「イオからの紹介です」
あきの顔が急激に歪む。
「ああん～！？」
途端にガラが悪くなった。ユウタロウは空気を一切読まず、聞き返されたのだろうとだけ、判断した。
「イオ、同僚の伊藤イオからの紹介です」
「そんな名前を2度も聞かせるな！　イオ、イオ、イオと！　てめえイオラの1つも使えねえのか！？」
立ち上がり、ユウタロウの胸倉をあきは掴む。それでも、ユウタロウは平然としていた。
余談であるが、イオ、イオラとは国民的ＲＰＧに登場する攻撃呪文の名前である。
「わかった。では今度から伊藤イオナズンと呼ぼう。これで解決だ」
さらに余談であるが、イオ、イオラ、イオナズンの順に威力が上がっていく。もっとも、今問題となっているのは呪文の質ではない。
「んなわけねえだろ！　ふざけてる暇あったら上着を脱げ！」
ユウタロウはあっさりと上着を脱いだ。すると、アキは獲物を前にした獣のような速さでスーツを奪い取り、もみくちゃになるほど物色を始めた。
この動きが意味していることを、ユウタロウは理解していた。自分も同じ事をしたことがあったからだ。
「盗聴器ならもうはずしてある」
「あの女があっさりと見つけさせるはずねえだろ！　ほら見ろ！！」
アキの手には新たに3つの盗聴器が握られていた。
この光景には、さすがのユウタロウも愕然とした顔を見せた。

「３つだと……何てことだ……。合計４つも盗聴器がついてたなんて縁起が悪い！」
「実害はもっと直接的にでるだろうが！！」
　嘆く論点がずれているユウタロウを怒鳴りつけながら、あきは盗聴機を叩きつけて踏みつけると大忙しである。
　余談であるが、４は死と発音が同じとして嫌われることがある。ただし、病院に４階がなく、５階と繰り上げて表記されているという話は、今では必ずしも正しいわけではないようだ。
　ユウタロウが一切慌てていないこととは、あまりに対照的であった。
「では、雨についての話を」
「てめえ……、この状況で気にならないのか？」
　ユウタロウを懐疑的な眼差しで眺めるあき。ユウタロウはしばらく考えてから、わかったように手を打った。
「……ハッ！　……ああ、上着を返してもらってなかった」
　上着を返してもらうユウタロウ。
「違えぇ！　てめえ、他人に関心とか興味ってねえのか！？」
「あまり」
　上着を羽織ながら、ユウタロウの目は真剣であった。面倒な奴に出会ってしまったと、アキはため息をつきながらクール・ダウンする。
「……もういい！　いいか、私にとってイオは天敵なんだ。あの女、すぐに盗聴器仕掛けてきやがる。　こちらの都合なんてお構いなしだ！」
「相手に都合を確かめてからしかける盗聴器なんて聞かないな」
「ともかく、てめえはイオの紹介で来た！　私のところにな。このことをどうとも思わねえのか！？」
　ユウタロウは、やはり冷静であった。この男、いつもどうしたいかは自分で決める。たとえ何があろうと慌てたくない時には慌てないのである。

「お前がイオと仲が悪いことはわかった。その理由も想像がつく。だが、それと私にどんな関係がある？　私はイオではないし、盗聴器にかかわってもいない。あなたがどんなにイオを嫌っていても、私には無関係だ」
「なんか正論言われたぁ～！」
　尋常でないほど嘆くアキ。ユウタロウは、もはや異常といえるほど冷静である。
「では、雨の話を」
　力が抜けたように態度が落ち着く。アキは、ため息をしながら言葉を続けた。
「わかりました。雨の話ですね。雨とは一言に言っても、それは難しいことです。たとえば、雨は天使や神、精霊がつかさどる存在として神格化されることもあります。天使マトリエルや、トラロック神がそれです。虹蛇と呼ばれる存在がそれです」
「そいつらが雨を降らせてるんですか！？」
「そいつら……。ともかく、ことは単純ではありません。神も、人がほしいときにほしいだけ雨を降らせてくれるわけでありません」
　早く話を切り上げてしまおうと、アキはもう小さいことにはこだわらないことにした。
「それはよくわかります！　秋にはからっからなのに、6月7月にはいやになるくらい降ってくる！」
「それが季節というものでしょ……。……こんな人が天気予報を……」
　ついまじまじとユウタロウの顔を見ていると、なんだかおかしな気分にさせられる。醸し出す雰囲気が何かおかしい。
「何か？」
「いえ、話を戻しましょう。たしかに雨が降ると様々な問題が起こります。でも、振らなければ農耕に始まった人類の文明は成り立たなかったでしょう」
「お聞きしたいのは、昔の人ってのはどうやって雨を見ていたかと

いうことです！」
「そうですね。猫が顔を洗う、蜘蛛の巣が乾く、ツバメが低く飛ぶなんて、動物の行動から予測するものもあるにはありますが、やはり面白いのは雨乞いでしょう。現在のメキシコにあたる地域では子どもを池に投げ込んで、神への生贄としたそうです」
「大学の敷地内に妙に深いため池がありましたけど、それですか？」
アキは、何故か、急に、ユウタロウから、顔を背けた。
「まさか～、この文明の時代に、そんな恐ろしげな実験が行われているはずないじゃないですか～」
「なぜ実験という表現を敢えて使用しました？」
ユウタロウは、まったく目を離そうとしない。張り詰める空気。ただし、息苦しさを感じているのも、負けたのもアキだけである。
「ち、違うんですよ、いつかは人を投げ落としてみたいな～、なんて考えてますけど、今は猫や犬……は動物愛護団体が怖いからしてませんから、せめて生野菜を投げ込んでみてるだけです！」
「まるで取り繕えいない気もするが、とりあえずそれは生ごみの不法投棄にあたる」
「だから違います！これは崇高な実験です！」
「やはり実験ですね」
「生ごみの不法投棄です！」
「やはりただごみを捨てているだけですね」
「実験です！」
「やっぱり……」
きりのない話にアキが切れた。拳骨でユウタロウの頭を小突く。
「いい加減にしろ！　きりがねえだろ！」
しかし、ユウタロウはやはり気にした様子はない。
「そっちこそ、実験か生ごみの不法投棄かはっきりしろ」
「実験だよ！　実験！！　有機物を投げ込んで雨が降るかどうか調べてたんだよ！」
「成果は？」

「実験していることはどうでもいいのか……？　お前本当に他人に無関心だな……」
結局、それで雨が振らせられるかどうかを知りたかっただけなのだ。
「他人のことなんて気にして天気予報ができるか！？」
ユウタロウは不必要なまでに力強い。
「できると思うけど……」
無理が通れば道理引っ込む。ユウタロウの強引さの前に、アキの言葉は小さく消えていく。
「で、成果は？」
「統計的に有意な差は見られなかった。ため池の水質が悪化しただけ……」
「実験は失敗か。どうやら、無駄足だったようだ」
失望した。そんな様子で、ユウタロウは立ち上がる。研究者として、アキにはそれが我慢ならなかった。
「雨を降らせる方法くらい！」
「何か知っているのか！？」
食いつくユウタロウ。しかし、アキに続ける言葉があったわけではない。
「……その……、雨乞いの儀式とか……」
「雨乞いか！？」
「一応、……成功率１００％だし……、昔の人はやってたし……。方法も……、ただ踊り続けるだけとか……」
「なんと！　よし、早速やってみる！」
ユウタロウは飛び出すほどの勢いで部屋を出て行った。残されたアキは自分に言い聞かせるように言葉をつぶやき続ける。
「私は嘘は言ってない……。言ってない……」

天気予報のスタジオ。まもなく収録である。
テレビの前にこれから立つというユウタロウに声をかけてきたのは同僚のイオである。
「その顔見ると、秋のところで何か掴んできたみたいね？」
「今の俺なら、覚醒だってしてみせる！　まかせておけ、イオナズン」
力強いグッド・サイン。さすがにイオもついていくことができない。
「その呼び方はともかく、期待してるから、雨乞い」
「なぜ知っている！」
「まあ、いいからいいから。ほら、本番始まるよ」
イオはユウタロウの背を押し、テレビの前に押し出す。
舞台の真ん中に出るユウタロウ。舞台の脇からナオキ社長も登場し、様子を見守っていた。
すると、何を思ったのか、ユウタロウはいきなり踊り出した。
「右の原っぱと書いて右原。右原ユウタロウのお天気コーナーです。明日は高気圧が日本列島全体を覆っており、雲ひとつない青空でしょう。でも、雨が降ります！　確実に！　どうしようもなく！　運命として！　晴れの日はＵＶカットに日傘を忘れずに。雨の日は雨傘に照る照る坊主を忘れずに。あたった日はユウタロウに感謝を忘れずに。以上、ユウタロウのお天気コーナーでした」
その様子を、イオは笑いながら。ナオキ社長は今にも目玉が飛び出しそうな顔をして見守る他なかった。

「ユウタロウはそうして、三日三晩踊り続けました。雲ひとつない快晴の部分まではあたりましたが、雨が降るはずもなく、苦情の電話は鳴り止みません」
どこか嬉しそうなイオの声。

２日目。
やはりユウタロウは踊っている。
「明日こそ雨です！　晴れの日はＵＶカットに日傘を忘れずに。雨の日は雨傘に照る照る坊主を忘れずに！　あたった日はユウタロウに感謝を忘れずに！！」

３日目。
やっぱりやはり、ユウタロウは踊っている。
「今日くらい雨だろう！　晴れの日はＵＶカットに日傘を忘れずに！　雨の日は雨傘に照る照る坊主を忘れずに！！　あたった日にはユウタロウに感謝を忘れずにぃ！！！」

楽しげなイオに比べて、ナオキ社長はすでに顔を覆ってうなっていた。

連日続く晴れに、苦しめられる男がいた。
「雨って聞いたから、塗装の準備なんてしてない！　……ああ、雨だから、後ハメ加工をしてようと思ったのに……」
余談であるが、後ハメ加工とは、プラモデルを各パーツを塗装後にも組み立てやすいよう加工を施すことである。塗装と違い、湿度に影響されないため、雨の日でも行うことが出来る。

第2話「雨を降らせる（１０－９）の方法」（後書き）

皆さん、盗聴は犯罪です。人の尊厳に関わる行為を軽々しく行ってはいけません。

第3話「日本“各”武装論」

「ようやく雨こそ降ったが、ユウタロウは当然、社長室に呼び出された♪」

何故かナレーター調のイオ。その通り、ここは社長室である。

社長であるナオキは、疲れきったように椅子に寄りかかっていた。

「いいか、ユウタロウ。雨乞いの儀式が確実に雨を降らせたわけはな、雨が降るまで踊り続けたからだ……」

「場合によっては1、2週間は踊り続けたなんてこともあったみたいだから、ユウタロウは運がいいね、ほんと♪」

「よくないわ！」

声こそ威勢がいいが、全身筋肉痛で、ユウタロウの動きはぎこちない。

ナオキ社長はため息もでない。

「昔ながらのやり方を無視しろとはいわんが、今の天気予報はその上に科学的に証明されていることを集めてつくられていることを忘れるな」

「それに、効果があっても、化学的な裏付けがないとテレビにはできないよ」

イオの言葉のどこに食いついたのか、ユウタロウは猛った。

「心霊番組のどこに科学的な裏づけがあるんだ！？」

ナオキ社長とイオ。そろって、面倒な話になりそうだと渋い顔をする。

「余計なところにばかり気付くな。あれは高視聴率が期待できる」

「だったら俺の予報が外れるのも妖怪か魑魅魍魎のせいにしてしまえばいい！　そうすれば苦情もなくなるし、視聴率もあがる！　一石二鳥だ！！」

「そんな存在の確認されていない輩持ち出して、誰が信じる？」

「いつ幽霊の存在が証明されました？」

ユウタロウの、普段はいい加減なことしか言わないくせに妙に的をついた発言をするユウタロウに、ナオキ社長は勢いを失いつつある。
「……まだされていない……」
余談であるが、現在の科学で証明されていないことを非科学的だと信じないことは、非科学的であるようだ。科学とは完全なものではなく、証明できないことが存在することこそが科学的な事実であるからである。
「ほらみたことか！？　科学だ！　文明だとか言いながら、今のテレビ局がどれだけいい加減な番組作りをしていることか！」
「……わかった」
「社長、本当にいいんですか？」
慌てるイオ。
「ああ。仕方あるまい」
「よし！！」
ユウタロウの勝利の雄たけびを聞きながら、ナオキ社長は睨み上げる。
「ではユウタロウ。お前は心霊特番と同じように夏の間、1月か2月の間テレビに出られればいい。そうだな？」
「わ、悪ふざけが過ぎました！　ボス！」
ユウタロウの見事な敬礼。
「わかればいい」
ため息をつくこともできない社長に代わり、イオが息を吹く。
「いい、ユウタロウ。昔に比べたら、私たちには科学という強い味方がついてる。そのことを忘れてもだめだし、もっと頼ってもいいと思うよ」
「科学が雨を降らせてくれるか！？」
「この人が本当に予報士の試験通ったのかわからなくなってきた……」
「いや、待て。そういえば、人工的に雨を降らせる研究をしている

人を取材したことがあったな。たしか……、二瓶ヨウコ……」
ナオキ社長が引き出しから1枚の名刺を取り出しながらその名前を読み上げる。その間に、ユウタロウは素早く名詞を引ったくり、光顔負けの速さで社長室を飛び出した。
余談であるが、光は秒速３０万ｋｍにもなる。なんと一秒間に地球を7周半もできる速度である。よって、地球の直径は約４万ｋｍである。7周半と言う数字を覚えておけば、光速から地球の直径を、地球の直径から光速を求めることができるため便利である。
残されたのは、名刺を持っていた姿勢のまま呆然とするナオキ社長と、何故か唇を奮わせるイオであった。
「社長、……二瓶ヨウコとか……、言いました……？」
「ああ。知ってるのか？」
途端にイオの顔が青ざめる。その体はユウタロウが出て行った扉へと、すぐに向けられた。
「い、急いでとめないと！！」
「急いでも無駄だ。１度走り出したあいつに追いつけるやつはいない」
ナオキ社長の言葉通り、イオはユウタロウの後姿さえ見つけることはできなかった。

「こうして俺は雨を降らせる方法を探すことになった。雨を降らせることができたなら天気予報が外れることはない。いや、予報どころではない！　確実に当てることができるなら、それは予言にも等しい！　完璧だ！　さすがは重野なおき社長！　サムライテレビを牛耳るだけはある。いや、知ってるならはじめてから教えてくれれば手間が省けたものを！　……まあいい。人口雨の研究……。それさえあれば恐れるものなど何もない！　まったく、科学の発達とは恐ろしい。最近では牛の糞からヴァニラを作ることもできるらしい。

人はどこまで進化してしまう、いや、どこに行ってしまうのか……？　そんなことを考えている内に、人口雨研究所の門が、なぜかはるか高くそびえていた」

不必要に厳重であった門を潜り、研究所に足を踏み入れたユウタロウを出迎えたのは、白衣の女性であった。細目。どこか寝ぼけているような、雰囲気のおかしな女性であった。

「二瓶ヨウコさんですね。私はサムライテレビの者です」

いつものように名刺を渡すユウタロウ。受け取るなり、ヨウコは手を叩いた。

「天気予報士の方。お名前は……、ああ、お兄さんが議員さんでしたね」

「議員どころか、銀行員だった兄さえおらんわ！」

「ご用件は？」

「なんて話の切り替えの早い！　だが、話も早い。実は、雨を降らせてほしい！」

どこか似た2人は、あっさりと本題に入る。

「どうしてですか？」

「雨を降らせてやれば、天気予報の的中率は１００％。それ以外に理由があるとでも？」

とぼけたようなヨウコと、妙に自信ありげなユウタロウ。

「いくらでもありますよ。運動会を中止させたいとか、体育祭を中止させたいとか……。体育なんて、運動できない子の公開処刑ですよね……。あんなの、なくなちゃえばいいんだ……」

「まさか、そのために人工雨の研究を……」

さすがのユウタロウも口に溜めた唾液を飲み込んだ。

ヨウコは笑うだけで、何も答えようとしない。そこはユウタロウである。自分以外のことに必要最低限を下回るくらい関心を持続で

きない。
「まあいい。あんたが運動ができようとできまいと関係ない。天気予報に人工雨は使えるか、Ｙｅｓ　ｏｒ　Ｎｏ？」
「Ｙｅｓ　ａｎｄ　Ｎｏ」
「Ｗｈｙ？」
　発音だけは妙によい２人。そして、息を合わせたように日本語に戻った。
「降らせることはできますけど、人工的に雨を降らせようとすると、散布する薬剤の影響や環境への弊害が無視できません。天気予報となると１度や２度ではすまないでしょうから、使用はとてもできません」
「年に１度の運動会なら使えるとでもいいたいのか！？」
　ヨウコ、やはり笑ったまま何も答えない。
「否定しろ、このマッド・サイエンティスト！」
　思わず、ユウタロウは手を突っ込みの形にして振った。
「ところで、ユウタロウさんはサムライテレビの天気予報士さんでしたね？」
　やはり、話題の変換は急である。
「そうだ」
「だったら、伊藤イオさんをご存知ありませんか？」
「同僚だ」
「大変でしょ。イオったらすぐ人に盗聴器なんて仕掛けるから」
「そうだな。何度見つけてもすぐ仕掛けてくるから、いっそのことと、今日は上着をおいてきた」
　ユウタロウは、今は上着を着ていなかった。
「イオ、１度仕掛けて面白くないとすぐ飽きるのに……。ユウタロウさん、イオによほど気に入られているみたいですね」
　何故かまぶしいくらいの笑顔を見せるヨウコ。
「いつもまじめ一辺倒の堅物である俺のことを盗聴しても面白くもなんともないはずだが、人は自分にないものを面白いと感じるんだ

ろうな」
「ですよね～」
「て、そうじゃない！雨を降らせることはどうなった！？」
「だから無理ですって」
「く、なんたることだ……。それならどうやって天気予報をすればいい……」
芝居がかった様子でうなだれるユウタロウであった。
「そうですよね～。普通の予報士さんはそれでも結構正確な予報だしてますけど、どうしてるんでしょうね～」
やはり、ヨウコは笑顔のままである。
「どこか棘を感じるのは気のせいか……」
「気のせいですよ～」
「そうか、それなら、よくない！　雨を降らせろ！」
「無理」
「降らせろ！」
「無理」
「降らせろ！」
まるで駄々をこねる子どもである。
「無理ですって。お力になれない代わりに、いいことを教えてあげます」
この言葉に、子どもが急に大人に戻った。
「聞こう」
「天気予報に欠かせない天気図は、人工衛星から撮られていることはご存知ですね？　これは日本独自の人工衛星を使用していることになっています。でも、こんな話もあります。ＧＰＳ、これはアメリカからもらったデータだけで運用されているそうです」
「その話は知ってる。だから、アメリカが急に取りやめたりすると、ＧＰＳは使用できなくなるんだってな」
「果たして、ＧＰＳだけでしょうか？」
急に神妙な面持ちになるヨウコと、それにつられるユウタロウ。

「というと……？」
「もしかしたら、天気のデータもアメリカからだとしたらどうでしょう？　天気の予報は重要な情報です。本当はアメリカ頼りなのに、政府はそれを隠しているのだとしたら」
「そんなことしてどんなメリットが……」
「アメリカが日本の天気予報をある程度都合のいいように操作できることになりますね。データを多少差し替えることも簡単でしょうし」
「それなら……、それなら俺の天気予報が外れることも納得がいく！　そうか、すべてはアメリカの陰謀だったのか！？　穿ちすぎだと俺の中の何かが言っているが、そんなの無視だ！」
　すぐさま研究所を飛び出そうとするユウタロウを、ヨウコは制止する。
「待ってください！」
「とめるな！」
「とめません。でも、今日は寒くなりますよ、この上着を着ていってください」
　その手には、一体どこから取り出したのか、男物のスーツの上着が握られていた。
「すまない！　では！」
　何の疑いもなくスーツを羽織ると、ユウタロウは研究室からソニック・ウェーブを目指して走り出した。
　余談ではあるが、ソニック・ウェーブとは大気中で音速を突破する際に生じる衝撃はのことである。１５℃で音速は秒速約３４０ｍ。我こそはと思う者は是非挑戦されたし。１００ｍを約０．２９秒で走れば到達可能である。
　部屋に残ったヨウコは、間延びした調子。
「昨日体重計に乗ったら、いつもより重かったの、それもきっとアメリカの陰謀ですよね～」

「俺はとんでもない事実に気づいてしまった。こんなこのに気づかなければ、一市民として平凡ながらも幸せな人生を送れたことだろう。だが、もうすべてが遅い。ちょうど坂道に転げ落ちたようなものだ。後戻りはできない。どうも縁起でもないたとえになってしまったが、俺は社会の暗部へと足を踏み入れることに決めた。そう、目的地は、防衛省である！」

防衛省の応接間。そこに通されたユウタロウの前に現れたのは若い男であった。

「石村ツトムと申します。はじめまして」

「はじめまして」

「お話によると、サムライテレビの方とか……。たしか……」

「画家してる弟なんていないぞ！　いったい誰と勘違いしてる！？」

ユウタロウは先手を打った。

余談であるが、この不思議な勘違いは実在の人物を想定していないことになっている。

「そ、そうですか……。わかりました。では、今日は何でも、日本の国防のあり方についてお聞きしたいとか？」

「アメリカにはいつ攻め込みますか？」

いきなり本題に入るユウタロウに、ツトムは目を丸くした。

「Ｗｈａｔ？」

何故か英語である。

余談であるが、小学生程度の単語を言っただけで英語を話すことができる気になって、もちろんいけない。

「アメリカにはいつ攻め込みますか？」

ツトムは公務員試験を突破した知識と経験から、素早く適切な判

断を下した。
ユウタロウを危険人物と認識し、相手にしないと決めたのである。
「……帰りはその扉から。お気をつけてお帰りください……」
背中を押し、堪えようとするユウタロウを扉から押し出そうとする。
「ニュースで、横暴な防衛省職員の特集を組むぞ」
途端に動きを止めるツトム。しばらく考え込んだ後、ユウタロウから離れて営業スマイルを見せた。
「私たちは日本国民の財産と生命を守ることにひたむきです」
仕切りなおしである。
「だから、アメリカにはいつ攻め込む？」
「ではお聞きしますが、アメリカに攻め込まなければならない理由がございますか？」
ユウタロウは目を鋭くする。不必要に高められる緊張。
「これはある人から聞いた話だ。公式に発表されていることと、実態がそぐわないことがある……。それも、日米間にだ……。そう、き……」
この後、しょうえいせい。気象衛星と続くところを、ツトムは大声で遮った。
「き、機密文書について言っておられるのですか！？　違います！
わが国は非核三原則に則り、核を持ち込む際には必ず事前協議を実施しており、事実としてわが国への核兵器の持込はございません！」
「そんなことはどうでもいい！　なぜ正確なデータを渡さない！！
そのせいで天気予報が……」
もはやツトムにユウタロウの声はまともに届いてなどいない。
「違います！　機密文書を公開直前になって水にとかして流したとか、トイレットペーパーに再生利用したという事実はございません！　ですから、核は！　核は！　……って、機密文書は外務省の所管だろうが！　貴様、どこの回し者だ！？」

突然態度を豹変させるツトム。ユウタロウの胸倉につかみかかった。
「サムライテレビだ」
「そんな言い訳が通じるか！？　てかなんで天気予報と防衛省が関係ある！？」
「大有りだろうが！　さっきからわけのわからないことばっかり言いやがって！　貴様らがしっかりしないから俺の天気予報も当たらないんだ！？」
ユウタロウもまた、相手を掴み返した。互いが互い、まともに話など通じていない。
「なんだと！？　軍人なめるな！　牙の抜けた狼だと！　檻の中の獅子だと！　防衛費を不正流用ばかりしているだと！」
次第にヒート・アップしていくツトム。残念ながらここにツトムをなだめてくれる人はいない。
「んなこと言っとらんわ！」
説得だとか調停だとか、そんなバランス感覚から最も遠いユウタロウだけである。
「見ていろ、3ヶ月、3ヶ月だ！　3ヶ月でアメリカ、中国、フランス、イギリス、ロシア、インド、パキスタン、イスラエル、北朝鮮の次に名前を並べてやる！」
「イスラエルは一応、持ってないことになってるだろ？」
ツトムは聞いてなどいない。
「なめるな！　アメリカは出て行け！　中国は被害者面いい加減にしろ！　イギリスはブラウン首相、ブレア首相に比べて地味だ！　フランス、サルコジ、人の金でバカンスとはいい身分だな！　ロシア、北方領土、本気で解決する気ねえだろ！　インド、教育法がなんとなく気に喰わん！　パキスタンなんてどんな国かもわからんわ！　イスラエル、左の頬たたかれたくらいで半殺しか！　北朝鮮、何をとちぐるってやがる！」
さすがのユウタロウも、ツトムが言ってはならないセリフを連呼

しだしていると察した。
「やつらにばかりでかい面させるか！　そう、日本も核ぶ……」
間一髪。後ろに回りこんだユウタロウは、うまく首に手を回し、ツトムを締め落とした。気を失ったツトムは、そのまま床に伸びた。

もちろん、そんなことを気にするユウタロウではない。
「これだからお役所仕事は……。しかし、これで天気予報の手がかりは途絶えてしまったな……。あてられないと苦情がきて……、苦情が来るから社長に怒られる……。そうか！？」
ユウタロウの中でロジックが徐々に組みあがり、天啓のように1つの結論を導き出した。
「苦情が来なくなればいいんだな！！！」

ここは、鮫島タダシの家である。眼鏡をかけたごく普通の少年であるタダシは机に座り、いつもの日課であるパソコンでのブログ観賞を行っていた。現在のお気に入りは天気予報士の右原ユウタロウのブログである。とにかくあたらないことで有名で予報を外す度、コメントが荒れるのだ。
余談であるが、この設定に実在のモデルは一切存在していない。
「右原の奴、またはずしてやんの。こいつくらい荒らしネタに困らないやつも珍しいよな。荒らし屋鮫島タダシの腕が鳴る♪　炎上、炎上。これじゃあ、右原消し炭だな。ゲラゲラ」
ゲラゲラと、わざわざ口にして軽快にキーボードを叩く。その時、突如部屋の扉が開かれた。そこにいたのは、他ならなぬサムライテレビ天気予報士右原ユウタロウである。
余談であるが、ブログなどで批判的なコメントが次々と投稿され収拾のつかなくなってしまった状況を俗に炎上すると表現する。
「わっ、なんだよあんた！？」

タダシはすぐにユウタロウであると気づく。気づいたところで、驚かない理由はないのだが。
ユウタロウはそんなタダシを構うことなく、胸倉を掴んで椅子から立たせる。
「ついに見つけたぞ。貴様だな、俺のブログに根も葉もない噂を書き込んでいたのは！　よくも能天気予報士ウルトラスーパーデラックスと呼んでくれたな！」
自分が書いたのは能天気予報士までである。そう抗議、してしまった。
「そこまで言ってない！　……しまった！」
慌てて口を押さえるがもう遅い。
「やはり貴様か！」
「どうしてここがわかったんだ！？」
ユウタロウの鼻息は荒い。
「決まっている。眼鏡かけた奴は根暗だ。根暗な奴が荒らしをすると相場が決まっている！！　A＝B。B＝CならA＝C！　よって、眼鏡をかけた奴は荒らしをするという論理が成立する！！」
タダシは、全国に散らばる仲間たちのために奮い立つ。
「全国１千万の眼鏡かけた人に謝れ！」
「もっと多いわ！」
「ツッコミどころそこかよ！？」
タダシを揺さぶる。ユウタロウ。今さらであるが、完全に論点がずれている。
「フフフ……。ようやく見つけたぜ。眼鏡かけたヤツを尾行して、実にお前が１０８人目だった！」
「無関係だった１０７人に謝れ！」
「盗人猛々しいとはこのことだな！」
「てか、それはあんたの方だろ。不法侵入だぞ！」
「正しければ、何をしても許される」
妙に気取った様子で、ユウタロウは空、正確には天井を見上げた。

「んなわけねだろ！！　宅配業者から鯨肉盗んだどこかの環境保護団体かよ！！」
「戯言は局でたっぷりと聞いてやる！　さあ、来い！」
引きずってでも連れ出そうとするユウタロウと、必死に抵抗するタダシ。
「これ誘拐だぞ！」
「確かに世間に認められることじゃないかもしれない。だが、それでも俺は天気予報士だ！　天気予報のためなら、何でもしてやる！
明日の予報を心待ちにしているすべての人のために！！」
「世間は天気予報にそこまで求めていない！」
今の、いや、ユウタロウには普段から、タダシの言葉が届いてなどいなかった。
「さあ。来い！　今ならまだ市中引き回しの上、磔獄門ですむ」
余談であるが、市中引き回しの上磔獄門とは、その言葉通り馬に乗せられ江戸市中を引き回された上、磔にされ槍で突き殺される、知る限り、最上位の刑罰である。
「それ以上の罰なんてねえだろ！？　うわ～！」
抵抗むなしく引きずられていくタダシ。そして誰もいなくなった。

第3話「日本“各”武装論」（後書き）

くどいようですが、やはり盗聴は犯罪です。

最終話「荒らしを呼ぶ男」

舞台はサムライテレビ社長室に戻る。部屋の中をイオが落ち着かない様子で歩き回っている。ナオキ社長は普段見ない部下の態度をいぶかしんでいた。

「どうした？　ずいぶん落ち着いていないようだが？」

イオは社長の机を叩く。

「どうしてヨウコのところに行かせたんですか？」

「彼女が君の友人とは知らなかった。何か問題でもあるのか？」

「大有りです！」

その時、社長室の扉が――ノックもなしに――いきなり開かれた。つい体をこわばらせるイオ。しかし、竹沢アキ――ユウタロウに雨乞いを踊ることをそそのかした張本人である――の姿を確認するなり、明らかに怒っているアキの様子も構わずにイオは緊張を解いた。

「なんだ、アキか……。驚いて損した」

「あの男差し向けてのあんただろ！？」

イオを指差すアキ。

余談であるが、人を指差してはいけない。

ナオキ社長は、また面倒そうな奴が来たとつい考えたが、応対しないわけにもいかなかった。

「この方は？」

「竹沢アキ。雨を文化面で研究していて、ユウタロウに雨乞いの方法を吹き込んだ張本人です！」

やはりイオはアキを指差す。

余談ではあるが、人を平気で指差すような大人になってはいけない。

「どこの天気予報士が雨乞いを予報に使う！？　あのユウタロウとかいう男ならやるって、わかってて送り込んだな！！」

「誤解よ。私だって、まさかあそこまでしてくれるなんて考えてなかった。ユウタロウはね、いつだってこちらの期待以上のことしてくれるけどね……」
イオは手を口元にあてていた。明らかに笑いを堪えているようである。
「確信犯だろうが、てめえ！！」
余談であるが、本来確信犯とは、より思想的な問題として、自身の良心に従い敢えて法を犯すことをさしている。よって、犯罪を意図して行うという意味ではなく、この使い方は若干ずれている。
「喧嘩はほかの場所でやってもらえないか、二人とも」
ここは他ならぬ、社長室である。
開かれた扉から、新たな人物が社長室に現れた。
「なんだかにぎやか～。私も混ざっていい？」
3人の視線が集まる。すると、その中でイオだけが体を凍りつかせた。
そこにいた人物は、二瓶ヨウコ。ユウタロウの愛国心をおかしな方向へと炊きつけた研究者である。
「ヨウコ……、まさかあんたにまで顔合わせるなんて……、今日は厄日だな……」
吐き捨てるように言うアキ。ヨウコは張り付いたような笑顔を崩すことはない。
「そう？　私って、いない時のほうが怖いってよく言われるよ。まるで盗聴器でもしかけてるみたいな情報通だから」
「文字通りだろうが！！」
そう、イオとヨウコ。どちらも盗聴という悪癖を持つ問題ある人間であった。しかし、今のイオにアキほどの気力はなかった。
「ユウタロウはあんたのところに行ったみたいだけど……、今どこ？」
「さあ、どこだろ。アメリカの陰謀だ、とか行って飛び出してったから」

「まさか、防衛省に行かせたんじゃないでしょうね……。もちろん盗聴器つけて」
「私ね、お母さんから嘘だけはついちゃいけないって言われてるの」
ヨウコは微笑んだままである。そして、何も言おうとはしない。
「だから仕向けたの……？　ユウタロウが防衛省に行くように……？」
ヨウコは、やはり何も言おうとしない。
否定しないということは、要するにそう言うことである。
「なんてことしたの！　よりにもよって防衛省で盗み聞きなんて……」
「おめえが言えることか！？」
アキのまっとうな突っ込み。
ナオキ社長は完全に気力が抜け落ち、ふけた顔になっていた。
「わかった。皆さんが同好の士であることはよくわかった。積もる話もあるだろうが、ここは社長室だ。話なら場所を変えて……」
「あんな奴らといっしょにするな！！」
アキは何と、日本有数のテレビ局であるサムライテレビの社長の胸倉を掴んだ。
余談であるが、この作品では、とにかく胸倉が掴まれる。これで4回目である。
「待て、落ち着け……！」
ちょうどそこへ、よりにもよってユウタロウが意気揚々と帰ってきた。肩越しに荒縄を担ぎ、縄の先には眼鏡の少年タダシがぐるぐる巻きにされている。
「俺には帰ってくる場所がある。これほどうれしいことはねえってもんだ！　右の原っぱと書いて右原、右原ユウタロウただいま帰還！　と、社長が襲撃されている！　クーデター勃発か！？」
アキがナオキ社長の胸倉を掴み、ヨウコとイオが口げんかをしている。人目では納得しがたい状況である。
余談であるが、クーデターを起こす際には如何に軍部の協力を取

り付けることができるかが、成功の鍵となるらしい。
「ややこしいタイミングでややこしい奴が帰ってきた……」
ナオキ社長の心労は耐えない。
余談はあるが、それが人の上に立つということである。
「よく見るとお前はアキ、竹沢アキだな！？　イオの仲間であるはずのお前がなぜ！？」
「寝言は寝て言え！！」
アキが腕の力を強めると、ナオキ社長の首がしまる。するとまるで潰される寸前のカエルのような声がした。
なお、余談であるが、潰されるカエルの声を聞いたことはない。
「そうか！？　イオじゃなくてイオナズンと呼ぶ約束だったな。任せろ！」
「おかしな名前持ち出さないで！」
ユウタロウには、イオの抗議を受け入れるだけの度量がないわけではないような気がしないでもない。
「不満か？　なら伊藤イオグランデとよ……」
「呼ぶな！！」
余談であるが、イオ、イオラ、イオナズンに続き、最近ではイオグランデという最上位の魔法が登場している。
「もとはあんたたちの盗聴癖が悪いんでしょ！！」
アキが叫ぶと、イオがわめく。
「ヨウコと一緒されたくない！！」
「え～、私たち、お友達でしょ～」
事態は加速度的に収拾がつかなくなっていく。イオとアキが牽制しあい、ヨウコがそれを楽しそうに眺めている。
余談であるが、アキはいまだにナオキ社長の胸倉を掴んだままである。
「で、その少年は？」
苦しげながらも、社長はこの場で唯一冷静に簀巻きにされている少年のことを訪ねた。

「この世界に満ちる、すべての諸悪の根源です！」
「そんな大それたことはしていない！！」
ただ荒らしをしているだけの少年である。少なくとも、ゴルゴダの丘でイエス・キリストを磔にした１３番目の人物でもなければ、ジョン・Ｆ・ケネディの暗殺にも関わっていない。
「頼む。これ以上面倒を増やさないでくれないか……？」
「これ以上……？　というと……？」
「あの人たち、なんかもめてるぜ」
簀巻きにされた状態での適切な指摘は、なかなかシュールな光景である。
「いい！　私は面白そうな人に盗聴器をしかけて面白いこと聞けるのをまつ待ち伏せ型！　でもヨウコは盗聴器を仕掛けた上で相手をわざと面白そうなところへ誘導する、いわば狩猟型なの！！」
「何が違う！？　それに、おめえもあたしのとこにあの男送ったろうが！！」
「私たち友達でしょ～」
イオとアキの議論。そして、あまり関係ないヨウコ。それはあまりに不毛である。ガンダムなんてみんな同じ顔に見える一般人と、ブレード・アンテナだけでどのガンダムかがわかるガノタの会話並みに不毛である。
余談であるが、ブレード・アンテナとは一般的には角と呼ばれている、ガンダムの額に設置されているＶ字のアンテナのことである。
さらに余談であるが、ガンダムのブレード・アンテナは必ずしもＶ字ではなく、二股であったり、途中で折れ曲がったりなどしている。
「ヨウコといっしょにしないで！！」
「あの２人、結局同じ盗聴犯だろ……？　なんであんなに毛嫌いしあってんだ……？」
荒らし、いや、前途多望な青少年のまっとうな問いかけに人生の先輩であるユウタロウが答える。

「わかってないな、坊主。同族嫌悪ってやつさ。なまじしていることが近いもんだから、まるで鏡でも見せられてるみたいに自分の欠点や嫌なところをまざまざ見せ付けられてる気分になるんだ」
「なら初めからから盗聴なんてすんなよ……」
正論を言うものは不思議と敵視されるということも正論である。
イオは2人をグーで殴りつけた。
「外野は黙ってて！　それよりヨウコ、防衛省に送ったって、まさか……」
「盗聴によると、ツトムさんに会ったみたい♪」
イオの顔から血の気が引いていく。
「な、な、なんてことを……！」
そこへ、ベスト・タイミングで石村ツトム――彼に国防を任せておけば日本の未来は明るい――が社長室の扉から中を覗き込んだ。誰1人、開けた扉を閉めるような礼儀を見せていないのだ。
余談であるが、このように話の展開ばかり優先し、非現実的なことや、できすぎた偶然を持ち出すことを業界用語でご都合主義という。
「サムライテレビの社長室はここでしょうか？」
「私が社長の重野なおきです。ご用件は？」
アキに胸倉を掴まれたままである。しかし、如何なる状況でも冷静に応対するのが社長というものである。
「実は、御社の社員である右原氏についてお聞きしたいことが……」
余談であるが、御社という表現は書く際に用いるものであるらしく、口語では貴社という表現が好まれるらしい。
ツトムが言葉を区切ったのは、イオの姿を見つけたからである。
「君がいるなんて……」
「ツトムさん、どうしたの……、急に？」
「それが、今日、君の会社から右原という人が来てね、すぐに帰ったんだけど、あとからどうも、盗聴器を持っていたらしいことがわかってね……」

「なんだ、彼氏の職場にまで盗聴器を持ち込んだのか？」
アキの無遠慮な一言に、ツトムは問い詰めるような表情をイオへと向けた。
「何だって……、君が盗聴を……？　そんな……」
「違うの、話を聞いて」
「そんな……、約束したじゃないか！？　防衛省だけは盗聴しないって！！」
「だから違うの！！」
余談であるが、殺人と恋愛には共通点がある。どちらも、些細なことが切っ掛けで、動機が回りに理解されることは稀である。
「どこならしていいもんでもねえだろ！　盗聴なんて！！」
この中で、非常識なはずの荒らしが一番常識的なことを口走った。
「荒らしが正論を述べるな！」
タダシを殴りつけるユウタロウ。
正論を述べる者は絶えず圧制者の暴威にさらされる。ここに、人類の悲しき歴史の縮図があった。
「荒らしにも基本的人権があるはずだ！！」
「そんなことを明記した法はない！」
余談であるが、日本国憲法では１１条、及び９７条に基本的人権が保障されている。しかし、そこには国民と書かれているだけであり、確かに荒らしとは明記されていない。
「ツトムさん、違うよ。それ仕掛けたの、イオじゃなくて私」
余談であるが、ヨウコの盗聴器とは、ユウタロウに渡した上着に仕込まれていた。
「すまない、イオ。君を疑ってしまって……」
「いいよ、わかってくれれば……」
途端に、２人の間に恋人同士の、テレビではよく桃色で表現されるような空気が流れた。
「どこかおかしいだろ！　……って、イオ……、もしかしてイオ姉ちゃん！？」

「どうして私の名前を……？」
「ほら、昔隣に住んでた、タダシ、鮫島タダシだよ！」
「タダシ君！　どうしてこんなところに？」
「ユウタロウに誘拐されたんだ！」
「人聞きの悪いことを言うな！　かどわかしただけだ！！」
「同じだろ！？」
「こっちのほうががかっこいいだろう！！」
「意味わかんねえ！！」
　ユウタロウの元から逃げ出そうとするタダシだが、足まで簀巻きにされては行動の制限が大きい。辛うじて傍から離れることができても、まるで唐傘お化けのような妙な歩き方をしてしまう。
「それより、どういうことだ？　俺が尋ねた人がことごとくお前の関係者とは？」
　アキとヨウコは友人で、ツトムは恋人、さらにタダシはかつてのご近所さんである。
　余談であるが、ありえない偶然は起き得ても、出来すぎた偶然は起こらない。確率論は０％でなければ起こりうるが、出来すぎている場合は仕組まれたものである可能性が極めて高いからである。
「アキは知ってたけど、ヨウコは偶然……、まさかツトムさんのところにまで行くなんて……」
「そんな身内だけで本当に俺の的中率が上げられると考えてのか？」
　余談であるが、これは元々、ユウタロウの的中率を上げるための種々の取り組みであることを、忘れてはいないだろうか。
「でも、いろいろな話は聞けたでしょ。みんな、問題はあるけど、優秀よ。余人をもって変えがたいとか何というか……」
「天気予報でなぜ防衛省に？」
　ツトムの疑問は、至極全うである。しかし、今更でもある。ユウタロウは、すでに構わず話を進めていた。
「誰も答えを示せない……。……それなら！　皆の意見を結集するほかない！　さあ、話し合え！　そして答えを！　合言葉は、みん

なは1人のために！　1人はウハウハに！」
「天気予報はよくわからないけど、コンピュータがしてくれるものじゃないのかい？」
「天気予報は晴れか、快晴かの違いを目測でしているように、まだまだ予報士の経験と知識に依存している部分が多いの」
「なら、あんたが勉強すりゃいいってことだろ……？」
ツトムとイオ。そしてタダシの的確な突っ込みが入る。
「貴様には黙秘権があった！」
「あった！？」
余談であるが、黙秘権は日本国憲法３８条に保障されている。
ユウタロウが握りこぶしを固めてタダシを追いかけると、タダシは不気味ながらも器用に飛び回り部屋の中を逃げ回る。
「それで雨を任意に降らせちまおうと……」
「人工雨はあくまでも雨雲に降雨を促すことしかできません。結局、雨雲がいつどのように来るか判断できないと無意味ですよ～」
アキにヨウコ。ようやく納得し始めた面々。
「ユウタロウ、結局、学問に王道なんてないよ」
「覇道ならあるのか！？」
「まあ、落ち着つけ。お前の焦る気持ちはわかるが、雨と人の歴史は本当に長くて、いまだに決着のついていない」
「人工雨の研究からもわかるとおり、気候のメカニズムはまだ完全には解明されていない。もう何百年と調べられているのに……」
「護岸も予報もない時代は、台風でさえ脅威でした。突然暴風雨がやってくる。洪水はもちろんのこと、地すべり、倒木と多数の死者が出たほどでした。確かに現在でも被害は０ではありません。でも、予報があるということがどれだけ恩恵を与えているか計り知れません」
「そう焦らないことだ」
アキにヨウコ、そしてツトムの言葉を、ナオキ社長が締めくくる。
ようやく、アキの手は胸倉から離れていた。

「しかし……」
「なあ、荒らしをしてるやつなんて、ほぼ全員が面白半分だ。でも、中にはいると思う……。あんたに、本当にがんばってもらいたいって考えてるやつも……」
「ユウタロウ。もっと受け入れてやってもいいんじゃないかな？天気予報士が的中させられたとしても、結局雨は降る。降ってもらいたくない人がいたとしても。それに、あくまでも、私たちが示すのは確率だけ。私たちが天気を担ってるなんて考えることはないよ。これから起こりうる可能性を示して、あとは視聴者に判断をお任せしてもいいんじゃないかな？」
　タダシとイオ。
「可能性を示すだけ……」
「降水確率が何％以上なら傘を持っていくのか、それは人によって違うだろ」
「私は朝降ってなければもってかないけど……」
「俺がいうのもなんだけど、そうギスギスしないで、もっとおおらかな気持ちでやれよ。変に肩肘はってると、疲れるだろ」
　余談であるが、セリフがとにかく並ぶ小説は誰が話しているのか途中からわかりにくくなってしまいがちである。上の４つの地続きのセリフは、上から順にユウタロウ、アキ、ヨウコ、タダシのセリフである。
「わかった。やってみる！」
　社長室から駆け出すユウタロウの顔は、つき物が落ちたように晴れ晴れとしていた。
「すぐに結果が出るとは思えませんが、天気と同じです。長く付き合うつもりでいましょう。時に疎ましいと感じる雨だって、降らなければさびしいものですから」
　ナオキ社長の言葉に、みな、思い思いの方法で頷いた。

天気予報の時間がやってきた。テレビに映し出されるのは、ユウタロウの姿である。
「右の原っぱと書いて右原。右原ユウタロウのお天気コーナーです。明日は、晴れかもしれませんし、雨かもしれません。嵐が来るかもしれませんし、台風の可能性もあります。霙や霰、雷や雹にも警戒してください。そうそう、曇りも忘れてはいけません。雪が降って、吹雪になるかもしれません。霧の発生も考えられます。晴れの日にはＵＶカットに日傘を忘れずに。雨の日には雨傘に照る照る坊主を忘れずに。あたった日にはユウタロウに感謝を忘れずに。以上、ユウタロウのお天気コーナーでした」

「その日、苦情の電話に回線はパンクした。ブログは炎上どころか、あまりの苦情の多さに焦土と化した♪」
何故かナレーター調のヨウコ。
社長室では、それぞれが思い思いのやり方でうなだれていた。
「何か、言い方が悪かったのかしら……？」
イオである。
「荒らしが荒らしにならない……こんなんじゃ……」
荒らしとは元々対象を過小評価する傾向にあるが、それをさらに下回られると、タダシには打つ手はなかった。
「全部の可能性示されたって、どうしろってんだ……？」
アキ。
「どうして、防衛省に来たのでしょう……？」
尽きない疑問に解放されないツトム。
「やはり砂漠に送るか……？」
机の上には、からからの砂漠の様子が印刷された規格書が妙な存在感を示していた。

余談であるが、砂漠とは、漢字の意味をそのままとると砂が少ないという意味になってしまう。そのため、以前は沙漠と表記された。この場合、水が少ないと言う意味になる。
そんな中で、ヨウコだけが楽しげに笑っていた。

「雪が降っても寒くないよう、服は重ね着した。嵐なんて来てもフードが守ってくれる。靴はゴム製で長靴だ。傘は何本も持ったし、霰や雹が来ても大丈夫……。でも……、お、重すぎて……、歩けん……」
男は倒れた。
余談であるが、ユウタロウの予報を真に受けて悲惨な目にあう人物の登場はこれで3度目である。ちなみに、すべて同一人物であり、朝倉マコトという名前が設定されている。

「苦情の電話なりやまないオフィスにて、ユウタロウはさらなる覚悟を固めていた。決して終わらないであろう天気との戦いに生涯をかけていどもうとしていたのである」
やはりナレーター調のヨウコ。
「俺は天気予報をし続ける！」
放映が終わったスタジオで、ユウタロウは不必要に胸を張っていた。
「おい、ユウタロウ。ブログがえらいことになってるぞ。罵詈雑言どころじゃない！　こんなひどい言葉、見たことない！」
片手にノート・パソコンを持ちながらタダシはユウタロウのブログを見ている。
「誰に疎まれても、憎まれても、嫌われても！」
ユウタロウは、そんなこと聞いちゃいない。

その後ろで、ナオキ社長が額に血管を浮き上がらせていた。
「ユウタロウ、パスポートの準備はできたか……？」
余談であるが、日本に砂漠は存在していない。鳥取砂丘は砂漠ではない。
「それが明日のためと信じているから！　晴れの日にはＵＶカットと日傘を忘れずに。雨の日には雨傘と照る照る坊主を忘れずに。あたった日にはユウタロウに感謝を忘れずに！」
余談であるが、この話はこれで終わりである。砂漠に送られたユウタロウがどうなったのかを書く予定は、現在のところ存在していない。

最終話「荒らしを呼ぶ男」（後書き）

余談であるが、盗聴がとにかく登場したこの小説は、盗聴を推奨するものではない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9177o/

荒らしを呼ぶ男

2010年11月16日22時25分発行